

法然仏教学研究センター 2015年度全体研究会

〈第1回〉

日 時：2015年4月13日（水）

- ・各班進捗状況発表

〈第2回〉

日 時：2015年5月15日（金）

参加者：18名

- ・研究発表

発表者：高津晴生（当センター嘱託研究員）

テーマ：浄土宗の持戒観

要 旨：宗義として専修念仏を立て、一方で戒法の伝授を行う浄土宗において持戒がいかなる意義を持つ行であるのかを、法然、聖光、良忠の三師の見解から考察した。法然においては、諸行を助業と位置づける考え方が見られ、それは持戒に関しても同様であるといえるが、法然の遺文から持戒の最たる意義を検討した時、「仏弟子としての求道の態度」とするのが妥当であるといえる。聖光においては、別時という限定的な場合において持戒を助業とする見解が見られた。良忠においても持戒を助業とする見解が見られ、また、さらに念仏の助業となる持戒の功用に関して、罪悪を自覚させ懺悔の念仏に至らしめる作用のあることも見受けられた。この三師の見解から、持戒は往生のための行とはならないが、仏教徒として重要な行であり、また念仏行を増進させるための助業となり得る行であることを見出せるのである。

- ・各班進捗状況発表

〈第3回〉

日 時：2015年6月22日（月）

参加者：18名

- ・研究発表

発表者：吉原寛樹（当センター嘱託研究員）

テーマ：法然門下における『逆修説法』の引用について

要旨：本発表では『逆修説法』における「功德」の特色、法然門下における『逆修説法』の引用傾向を考察し、『逆修説法』が法然浄土教において占める特質を明確にしていく事を目的とした。『逆修説法』における「功德」の特色とは、一貫して「阿弥陀仏・浄土三部経」の功德が中心に説かれている事であった。また法然門下における『逆修説法』の引用箇所を見ると、阿弥陀仏の功德に関する講説において『逆修説法』が引用されている事が分かった。これにより、『逆修説法』は「阿弥陀仏・浄土三部経」の功德が中心に説かれており、法然門下においても阿弥陀仏の功德に関する講説として扱っている事が分かった。さらに、『逆修説法』には阿弥陀仏の諸功德を講説するという意図があった事が明らかになり、『逆修説法』は阿弥陀仏の功德論と位置づけられる事が言えるのである。

・各班進捗状況発表

〈第4回〉

日時：2015年10月16日（金）

参加者：14名

・研究発表

発表者：杉山憲哉（当センター学術研究員）

テーマ：西山派證空上人の行状における問題点

要旨：西山派の證空は法然の高弟の一人である。證空が法然生前中に果たした役割は大きく、法然滅後も京都における念仏弘通の中心人物であったのだが、西山派の人師であるが故に、共通認識を持たないまま現在に至っている可能性はないだろうか。

そこで、本発表では、證空の生涯の内、特に法然晩年時における證空の行状を取り上げた。具体的には、『浄土宗大辞典』における記述をめぐって考察を行なった。その結果、史実とは異なる箇所が見られることと、誤解されかねない箇所が見受けられることを指摘した。最後に、記述内容の改正に向けた試案を提言させて頂いた。

・各班進捗状況発表

〈第5回〉

日 時：2015年11月16日（月）

参加者：13名

・研究発表

発表者：上野忠昭（当センター嘱託研究員・浄願寺副住職）

テーマ：桑門秀我『選擇本願念佛集講義』における「相傳ノ義」の検証

要 旨：現在、現代語訳註を進めている桑門秀我『選擇本願念佛集講義』は、主に浄土宗二祖聖光・三祖良忠・七祖聖問の解釈をもとに法然『選択集』を解説している。その中で自ら典拠を明らかにしている箇所にかぎらず、浄土宗の祖師たちが積み上げてきた議論を注疏類から抄出した文言そのもので全体が構成されており、桑門の私見はほとんどない。本書の「相傳の義」として解説されている箇所からいくつかを選び、その規準を検証した。

・各班進捗状況発表

〈第6回〉

日 時：2015年12月11日（金）

参加者：14名

・研究発表

発表者：中御門敬教（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所研究員）

テーマ：明恵『摧邪輪』の引用仏典について

要 旨：明恵（高弁.1173—1232（承安3—寛喜4））による『摧邪輪』の引用経論に関する発表を行った。今回紹介した箇所は、巻上の冒頭の用例である。

今後もひき続き、以下の二点に留意し、『摧邪輪』本文理解に資する形の資料提供を、目的とした引用仏典の研究を行いたい。

①インド起源の経論を対象として、当該箇所の梵語、藏訳、漢訳の出所を示し、必要に応じて現代語への翻訳を行う。

②当該箇所の先行研究について近年の訳註研究をも含めて、知見の及ぶ限り言及する。

こうした諸点を加味して、原拠文脈からはこう読むべきであり、原拠からこういう意図で引用された、という指摘を出すことが、筆者の最終的な課題である。本稿はその開始である。

・各班進捗状況発表

〈第7回〉

日 時：2016年1月22日（月）

参加者：16名

・研究発表

発表者：真柄和人（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所嘱託研究員）

テーマ：醍醐本一期物語の構成

要 旨：法然法語と呼ばれる資料を用いて数えきれないくらい浄土学論文が作成されてきた。ところが法語群一編一編を鳥瞰的に見る努力がなされず、自説に都合のいい法語を切り取り利用されてきたように思う。さらに、問答の形式を取る法然上人の法語集を、ある仏教学者が「法然上人と弟子とのやりとりが生き生きと表現されている」などと述べている。これも大きな誤解を生む表現であった。

法語の一編一編は法然上人の言行録と考えてよい。第三者が一つの意図を持って法然上人の言動を編集収録したものに他ならない。その編集意図の故に「問答」や「聞書」や「物語」と銘打たれ、今日まで伝えられてきたと考えている。わざわざ『一期物語』の構成」と題した理由がここにある。その構成の様を伺おうというのである。

『一期物語』が、意味ある構成を持ち、主張ある一つの物語集であることを先学はすでに見抜いておられたはずである。ところが、それが捨て置かれた。今は、一編一編の法語を鳥瞰的に丁寧に解き明かさねば納得を得られぬ時代となってきたと考える。

構成を論ずる前に、まず、何者かによって『一期物語』と名付けられた意味について私見を述べておく。醍醐寺蔵本『法然上人傳記』「一期物語」の中に「只今の仰せを以て如来の金言ト存ずべく候」と述べる件がある。法然上人の言葉を仏説の如く保持しようとする弟子達の思い入れの言葉である。私はこの言葉から経典の定形句を連想する。「如是我聞、一時佛在」「佛告阿難」とする経典表現である。法然上人法語編集の弟子達は、釈尊に常に付き従う阿難の如くに、上人（如来）の金言を見聞（如是我聞）したのではないか。「一期物語」は、法然上人（佛）が一期（或時、一時）弟子勢観房（阿難）に物語（告）ったという設定での記録集ではなかったかと考えている。整然として何一つ無駄のない秩序ある物語に編集されている。「一期(あるとき)(或時、一時(あるとき))の

物語」と名づけるにふさわしい金言集と言える。

ここでは、醍醐寺蔵『法然上人傳記』内の『一期物語』に当たる箇所を、本傳記の最初の二十話ととらえておく。続く十一問答の問題点は今後の課題となるであろう。

- ・各班進捗状況発表

以上